

都市環境としての大江戸の水系と海岸

正 井 泰 夫

I 中世における水系

III 海岸変化

II 幕末期における水系網

現代的巨大都市東京の都市生活環境は、水系と海岸の利用形態に如実に現われている。その場合、江戸城築城以来の江戸の実態を考察することは、きわめて有意義であると思われる。

I 中世における水系

内藤昌は、その『江戸と江戸城』¹⁾の中で、『長禄年間江戸図』および『合考荏土覽古図』による江戸一帯の地形と水系の図を提示している。この図は正確性にかなり欠けるため、現在の地形に大縮尺の精度で置きかえることはむづかしい。しかし、大ざっぱな位置はほぼ推定できる。図1は、筆者が作成した『幕末の江戸の土地利用』²⁾に、当時の主な水系等を記入したものである。いうまでもなく、海岸線の形状も大きく異っており、日比谷入江が大きく入りこんでいた。太田道灌による最初の江戸城の築城は1457年のことで、まだ戦国時代には入っていなかった。当時の江戸城は、徳川家によるものよりもはるかに小形で、現在の皇居東御苑（本丸跡）にあった。ここは山手洪積台地の突出部で、北に下平川の谷があり、南に千鳥ヶ淵から流れてくる川があった。

当時の江戸は、ほとんど町らしい様相を呈していなかった。築城は町の建設を特に伴わなかったからである。しかし、若干の村落は存在した。また、のちに有名になった浅草寺・増上寺・善福寺・本住院・目黒不動・山王権現堂などは、もうその時に存在していた。

幕末の江戸の範囲で考察すると、当時の水系には、隅田川をはじめ、いくつもの川があった。隅田川の河口には、すでに2・3の中州があり、また千潟もひろがっていた。しかし、現在の石川島（当時は向島）から外は完全な海であった。隅田川の河口部周辺には湿地帯がひろがっていた。また、千束池と呼ばれた湿地帯は沼状を呈しており、下谷から浅草方面へかけて約3kmも続いていた。三河島一帯も低湿であった。

山手台地には数多くの開析谷が刻まれていた。上野・本郷台地の間の谷には、現在の約2倍ほどの規模の不忍池があった。千鳥ヶ淵は当時から池であり、また、溜池も湿地にある池であった。飯田橋から水道橋にかけても大池と呼ばれる沼地があった。古川が大きく屈折する一の橋一帯にも、かなりの規模の湿地帯があった。

当時の水系で、現在と大きく異なるのは下平川である。妙正寺川の下流に当る下平川は、大池のところから一橋をへて日本橋方面へ南東流し、隅田川と河口で合流していた。神田山（駿河台）の北側

を切る外濠は、江戸時代に入ってから人工的につくって神田川へ連絡させたものである。

当時の小水系の大部分は、今日では暗渠となっており、都市生活環境におけるアメニティとしての利用はほとんど不可能となっている。暗渠とならなかった比較的大きい川も、その大部分の水際が、アメニティ的利用には適さない利用形態となっている。

II 幕末期における水系網

130万を大きく上回る大人口をかかえていた大江戸は、山手台地と隅田川等の沿岸の低地とからなっていた。人口の面では、圧倒的に低地利用型であったが、これは、当時の他の日本の都市と共通である。

大江戸の水系網は、大きく3つに分類することができる。①隅田川河口部一帯の稠密な水路網、②山手台地の開析谷の水系、③江戸城の濠。

隅田川河口部一帯の水路網は、自然河川によるものは少数で、大部分は人工的につくられたものである。低湿地なので、排水が必要であった上、埋立地では始めから排水路を構築した。水路網はさらに水運にも大いに利用された。その中でも、蔵前・竹蔵・舟蔵・靱蔵などのような幕府直轄の港湾倉庫施設は目立った。隅田川下流・河口部は、大きな河港として機能していたのである。

倉庫業的機能の1種として、深川の木場の存在は特筆に値しよう。ここでは、木材の貯蔵のために大小多数の池がつくられた。もちろん、ここでは木材の取引も行われたために、単に倉庫業機能のみを強調するのは当を得ていない。いずれにせよ、海拔高度1m以下の低い土地の多かった木場一帯では、盛土のために穴を掘り、それが池となって利用されたのである。

江東地区には直線状の水路が何本も見られる。堅川・横川・小名木川・仙台堀などが知られている。北割下水・南割下水のように、排水目的を明示した水路もあったが、いうまでもなく、これらも水運に利用された。

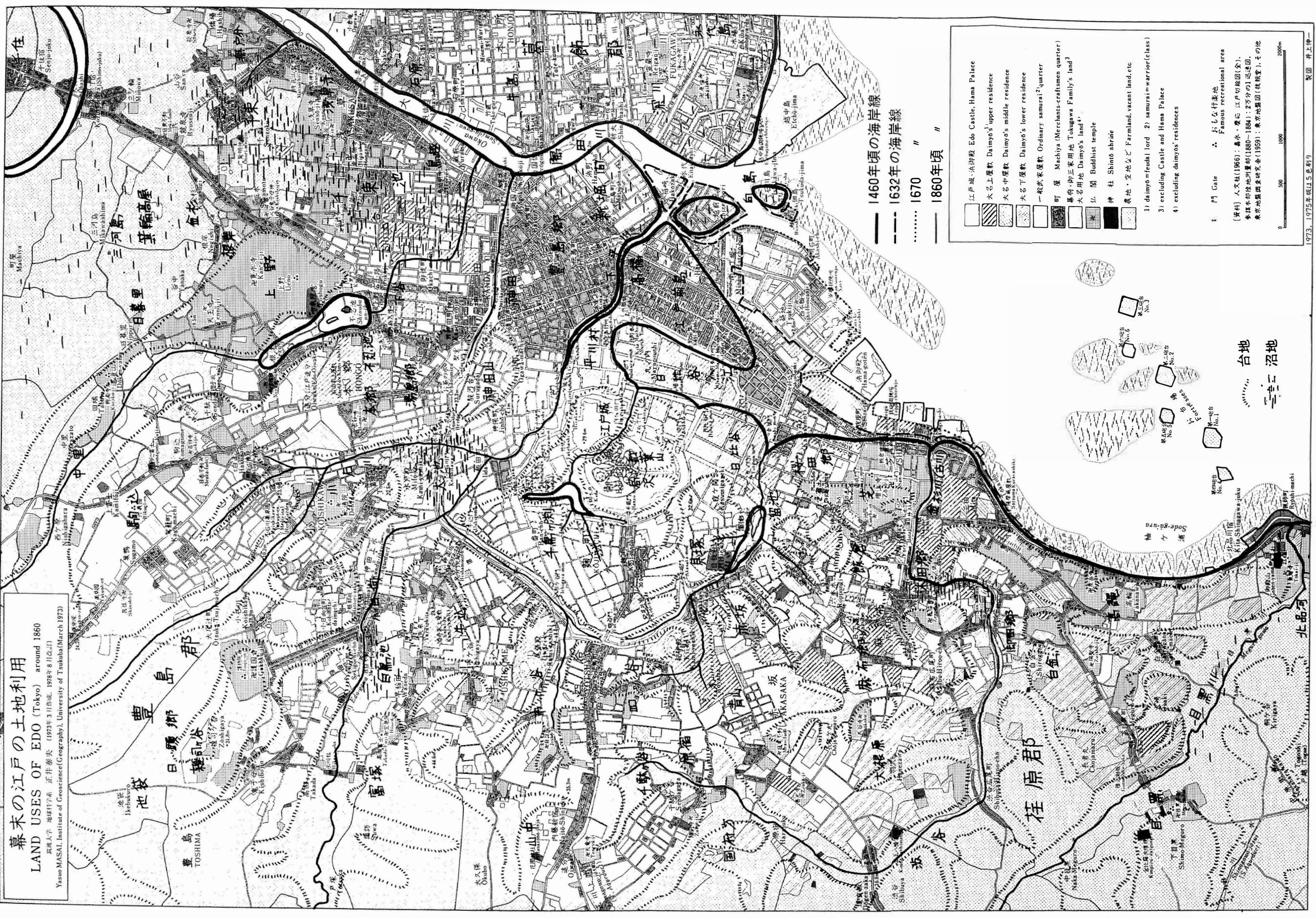
隅田川以西の低地にも、きわめて密な水路網がつくられていた。日本橋・江戸橋をつなぐ水路は特に重要で、都市としての江戸の中心を流れていた。水産国の特徴として、大規模な魚河岸が日本橋から江戸橋辺りへかけて存在していた。

人工水路の多くは、排水および水運に大いに利用されたが、防御目的のものも少なくなかった。城の濠は別としても、いくつかの大名屋敷や寺は、環濠形式をとっていた。これは泥棒・外敵・火災を防ぐためのものであると同時に、景観美化の役割も果たしていたと思われる。

山手台地の開析谷の水系³⁾は、神田川のようにかなり人工化されたものもあったが、他の多くは、まだ自然河川の状態を示していた。そのため、洪水をしばしば受けた。小石川台地の南麓には、江戸川(妙正寺川)より分流した神田上水が流れていた。また、西からきた玉川上水は、新宿の大木戸の所で南へ曲り、渋谷川をへて古川へ流下した。これらの上水から多数の小水路が分流していたことは、いうまでもない。

江戸城をとりまく濠は、大きく内濠と外濠に分けられる。内濠は、本丸をとりまくものと城全体をとりまくものとの二重構造を示していた。台地をきざむ開析谷を利用して内濠がつくられたが、盛土

幕末の江戸の土地利用
 LAND USES OF EDO (Tokyo) around 1860
 筑波大学 地理学系 正井泰夫 (1973年3月10日版, 1978年8月11日改訂)
 Yasuo MASAI, Institute of Geoscience(Geography), University of Tsukuba(March 1973)



江戸城: 天守殿 Edo Castle, Hama Palace
 大名上屋敷 Daimyo's upper residence
 大名中屋敷 Daimyo's middle residence
 大名下屋敷 Daimyo's lower residence
 一般武家屋敷 Ordinary samurai's quarter
 町屋 Machiya (Merchant-craftsmen quarter)
 幕府・御三家用地 Tokugawa Family's land³
 大名用地 Daimyo's land⁴
 仏閣 Buddhist temple
 神社 Shinto shrine
 農地・空地など Farmland, vacant land, etc.

1) daimyo=fudai lord 2) samurai=warrior(class)
 3) excluding Castle and Hama Palace
 4) excluding daimyo's residences

門 Gate
 おもむき地 Famous recreational area

[資料] 人文社: 幕末 江戸の地図(全), 幕末水部陸地測量部(1880-1884): 2分の1 迅速図, 東京地盤調査研究会(1959): 東京地盤図(積層型), その他

0 500 1000 2000m
 1973. 1975年版(15色刷り) 製図 井上伸一

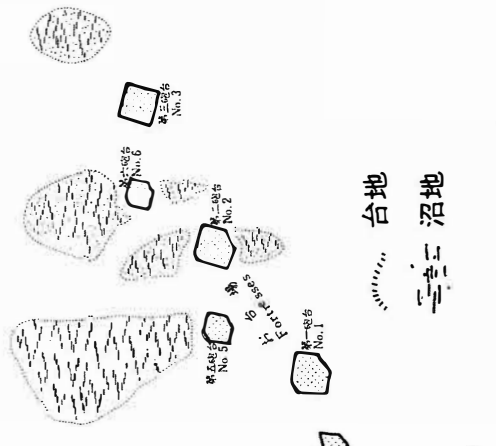
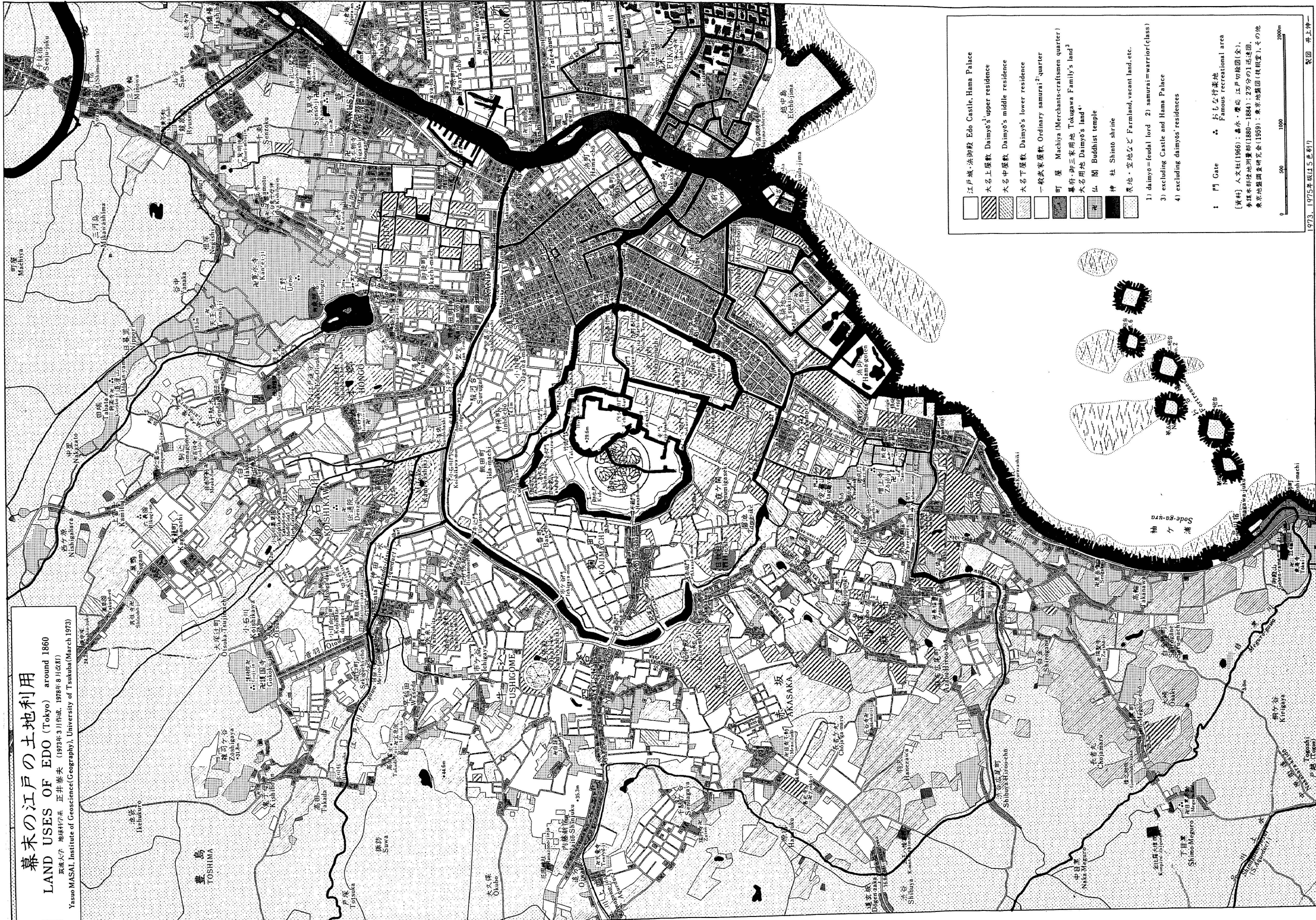


図1 江戸の地形と水系(1460年頃; 確認すのみ)と海岸線の変化

幕末の江戸の土地利用
 LAND USES OF EDO (Tokyo) around 1860
 筑波大学 地理学系 正井 泰夫 (1973年3月作成, 1978年8月改訂)
 Yasuo MASAI, Institute of Geoscience (Geography), University of Tsukuba (March 1973)



[Pattern]	江戸城・法御殿 Edo Castle, Hama Palace
[Pattern]	大名上屋敷 Daimyō's upper residence
[Pattern]	大名中屋敷 Daimyō's middle residence
[Pattern]	大名下屋敷 Daimyō's lower residence
[Pattern]	一般武家屋敷 Ordinary samurai's quarter
[Pattern]	町屋 Machiya (Merchants/craftsmen quarter)
[Pattern]	幕府・御三家用地 Tokugawa Family's land ³
[Pattern]	大名用地 Daimyō's land ⁴
[Pattern]	仏閣 Buddhist temple
[Pattern]	神社 Shintō shrine
[Pattern]	農地・空地など Farmland, vacant land, etc.

1) daimyō = feudal lord 2) samurai = warrior(class)
 3) excluding Castle and Hama Palace
 4) excluding daimyō's residences

◻ 門 Gate ◻ おもひな行楽地
 Famous recreational area

[資料] 人文社(1966): 幕末・慶応 江戸切絵図(全),
 参謀本部陸地測量部(1880-1884): 2万分の1 迅速図,
 東京地盤調査研究会(1959): 東京地盤図(後編等), その他

0 500 1000 2000m

図2 幕末における大江戸の水系網

のため、かなりの量の台地の土砂が切りくずされた。外濠は、原則的には螺旋型をとっている。この場合にも、自然の地形が巧みに利用されたが、駿河台の場合のように、台地を大きく切りこむ作業も伴っており、建設費は莫大であった。低地における濠は、一般の水路網と直接連絡しているが、これは主として排水目的のためである。

III 海岸変化

江戸の海岸変化は、海岸線の変化と土地利用、景観の変化の両者でとらえる必要がある。中世における海岸線は、幕末のそれとはかなり違っていた。最も大きな相違点は、日比谷入江の存在であった。1603年に江戸に徳川幕府が成立し、以後、急速な都市づくりが行われた。それに伴い、海岸線の形状は大きく変化した。

日比谷入江は、もともと浅く、自然的にも土砂の堆積による陸化が進んでいたが、徳川幕府は、城の海側前面に大規模な街をつくるため、埋立てを促進した。幕府成立後30年たった1632年における海岸線は、すでに、江戸の中心的町屋地区（新橋から筋違門までの間の日本橋を中心とした町人町）の全域を陸化していた。干潟や中洲が多かったため、埋立は比較的容易であったと思われるが、それにしても急速な埋立工事であった。隅田川の河口には石川島が、以前からあった中洲を利用してつくられた。その後、さらに埋立は急速に行われた。1670年までには、築地一帯の埋立も終わっていた。

江戸時代後期には、埋立のテンポはやや落ちた。人口抑制策が一応成功し、江戸の急速な人口増加がほぼ止ったからである。その結果、埋立を促進しようとする施策の緊急性が低下したのである。

1670年から1860年の200年近い間に造成された土地の大部分は、越中島のような未利用地か、浜御殿あるいは蔵屋敷であった。越中島と芝の海岸には鉄砲調練所がつけられた。さらに品川沖にはか6か所のお台場が構築されたが、これらは黒船対策上つけられたものである。また、築地には軍艦操練所が置かれ、江戸湾頭は、かなりの軍事的色彩を示すようになった。

大江戸の港湾・倉庫業機能が最も集中していたのは隅田川下流部であるが、河口から築地をへて三田方面へ至る海岸部にも、多くの蔵屋敷が存在し、この機能の集中を見せている。人工島の佃島や品川には獵師町も形成されていた。

しかし、海岸部のすべてが、港湾・倉庫業・軍事施設あるいは未利用地であったのではない。三田から品川にかけての東海道沿いの袖ヶ浦沿岸は、そのほとんどが町屋であった。また、浜御殿のように、海岸の景色を眺めることのできる庭園もあった。むしろ現在よりかアメニティ享受の可能性が大であったといえよう。

× × ×

本論文を、昭和55年3月で筑波大学を定年退官される高野史男教授に捧げます。また、本研究には、文部省科学研究費「湾岸都市の環境動態に関する総合的生態学的研究」（昭53。代表者：沼田真教授）を使わせていただきました。

参考文献

- 1) 内藤 昌(1966)：江戸と江戸城。鹿島出版会。
- 2) 正井泰夫(1979)：徒歩交通百万都市としての大江
- 戸。筑波大学人文地理学研究Ⅲ。
- 3) 貝塚爽平(1964)：東京の自然史。紀伊国屋書店。